

## モノを作る心

株式会社インテリアセンター企画課長 清水 潤

モノづくりという行為は、昔からいろいろな形で生活に関わってきました。しかし“デザイン”という言葉が日常生活に関わり始めたのはそれ程古くはありません。

昭和33年通産省にデザイン課が設置され、Gマーク（グッドデザイン）選定業務が行われるようになりました。その選定基準は、Gマーク選定の趣旨である無駄な加飾を排し、機能に忠実な造形を尊重し価格の合理性を有するモノということにあります。その後昭和40年代に入ってGマーク商品が急増し、デザインに対する関心が急速に高まりました。

現在に至っては、『氾濫』といっても過言でないほどモノであふれているため、一つのモノを選ぶことすら難しい状況にあります。一軒の文房具店へ行ってボールペン1本選ぶのでさえ迷うのに、今となってはボールペンは文房具店でなくても、街のいたるところから手に入れることができるのです。

一つのモノが選ばれる条件は、良いモノ、安いモノという判断だけではなくなってきました。選ぶ人にとって本当に気に入っている、他人にはない自分だけのモノ、価格や機能は別として機能主義一辺倒のデザインに対して何かをイメージさせる、訴えとか、一味違うというようなデザインが支持されてきているのです。

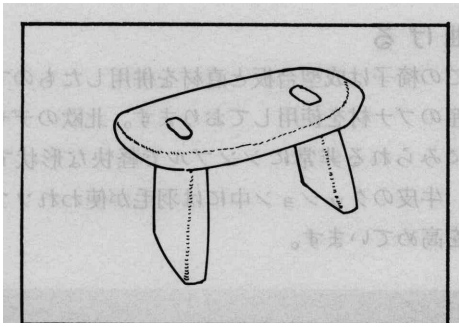
家具を例にあげてみます。家具は、収納・テーブル・椅子の三つに大別され、この中でも特に椅子は様々なデザインのものがあります。椅子の条件としては、座りやすく丈夫であることが満たさ

れていけば良いのですが、座ると冷たい金属性の座の椅子など、座って休息するには耐えられないような、形や色の面白さを追及した椅子をよく見かけます。これには、椅子に対する要求・価値観が広がったことで発生してきた、自己主張・ニーズの多様化を反映した傾向ということがいえるのではないかと思います。また、使う人の性別や世代、使われる場・機能・空間等TPOに応じた椅子のデザインが幅広く求められていることがいえるでしょう。

ところで、椅子は座るといふ行為における生活の道具として色々な表情を持ち、様々な表現を可能にする彫刻的なものとも言えます。大阪に在住するグラフィックデザイナーが、世界中の著名なデザイナーや作家の“作品”としての椅子を収集されており、現在その数は600程で、目標はこの3倍だそうです。日本国内だけでもデザインの基準は別としてどれほどの数のデザインが考えられ、作られているのか、また世界中ともなれば想



ツタンカーメン黄金の椅子



登呂遺跡から発掘された腰掛け

像もつかない数になります。

写真にあるこの椅子は、古代エジプトの王であったツタンカーメンの黄金の椅子で、脚には御子や聖蛇が、背には王と王妃が精巧な技術で彫られております。このように当時の職人の技能には目をみはるものがあり、また椅子としての基本形態もすでに今日のものと比較して劣らないものであります。

一方日本では、上図に示すように弥生時代の部落跡として有名な登呂遺跡から発掘された腰掛けがあります。座板に脚を取り付ける穴があけられ、脚を差し込むかたちで、三つの部品から構成されており、しかも安定性を考慮し、脚は八の字型になっています。この腰掛けは部落の『長』または『古老』のためのものであり、儀式や会合の時のみ使われたといわれております。

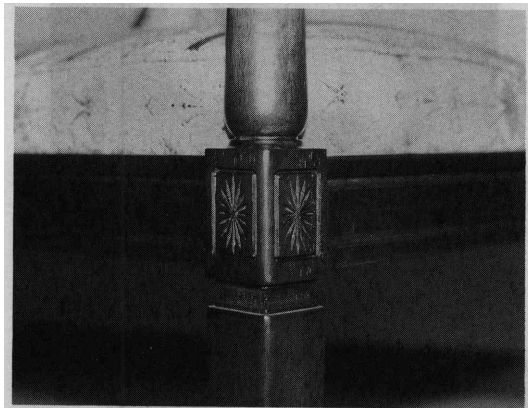
椅子は本来『権威の象徴』として始まり、その意識は18世紀に至るまで続き、イギリスの建築史家のジョン・ロークは著書の中で『椅子の基本的な形態は権威の象徴である…。形態は、それを使用する男女の生活姿勢一身のこなし・動作・態度によって規定されるので他のいかなる家具よりも忠実に権威や優雅さを反映する』と述べています。

椅子が発案されてから3000年近くになり、今もなお次々と新しい椅子が生まれ続けております。これ程良い歴史を持っている道具としての椅子は、我々の生活の中でも数少ない道具ではないかと思えます。

次に木製の椅子の写真をもとに触れたいと思います。木工の工作法である切る・彫る・削る・曲げるを基本に考慮した、デザインの製品であります。

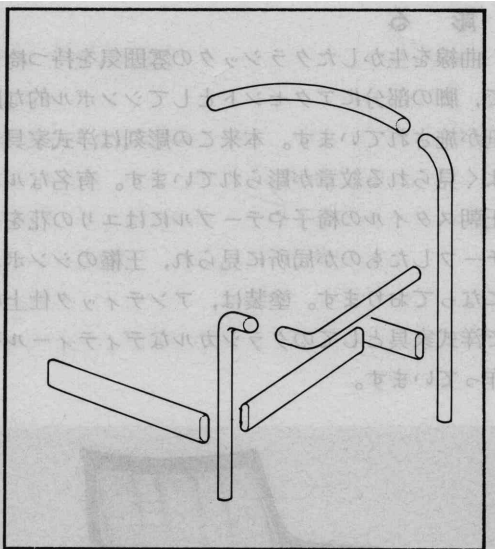
## 彫る

曲線を生かしたクラシックの雰囲気を持つ椅子で、脚の部分にアクセントとしてシンボリックな彫刻が施されています。本来この彫刻は洋式家具によく見られる紋章が彫られています。有名なルイ王朝スタイルの椅子やテーブルにはユリの花をモチーフしたものが局所に見られ、王権のシンボルになっております。塗装は、アンティーク仕上げで洋式家具としてのクラシカルなディテールを作っています。

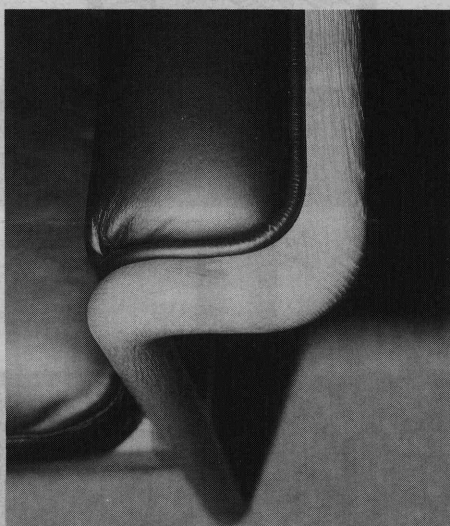


## 削る

この椅子は一見すると曲木の技術で作られているように見えますが、次の図に示す様に、削りだされた部分をフィンガージョイントという、西ドイツで開発された技術で継ぎ組み立てられています。部材の木目が切れた形で使われているため、いかに強度を保持するかが重要なポイントとなっています。



削る



### 曲げる

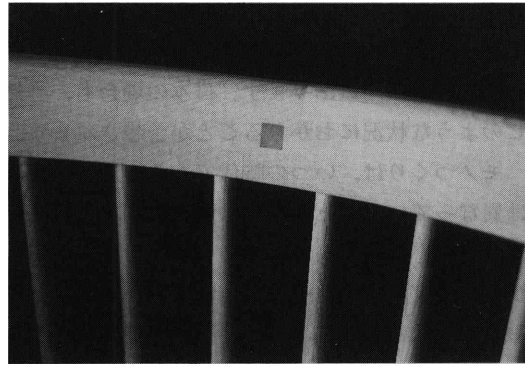
この椅子は成型合板と直材を併用したもので、道産のブナ材を使用しております。北欧のデザインにみられる非常にシンプルで軽快な形状であり、牛皮のクッション中には羽毛が使われソフト感を高めています。



### 素材

このテーブルはナラの直材を4～5枚ハギ合わせ、長手方向の面形状は耳付の材料をそのまま生かし、材料の型通りに仕上げられています。ですから天板の形状は同じものが二つとなく、また節のある材料は欠点を利点としてそのまま生かしています。従ってハギ合わせの段階で天板全体に節がバランスよくデザインされるよう注意を必要とします。脚は天板とは逆に直線を強調し、断面がゴマ柄の形状となっております。天板の自然な形状と脚の直線的な形状との組み合わせにより、味わい深いテーブルとなっております。

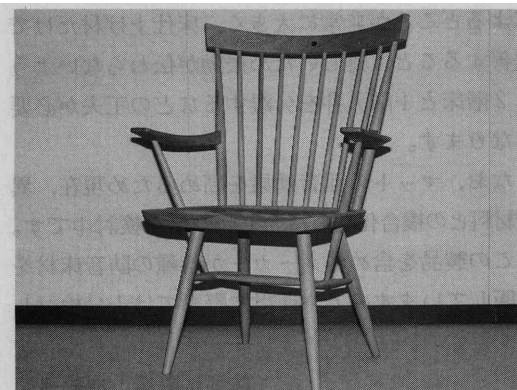




## 構造

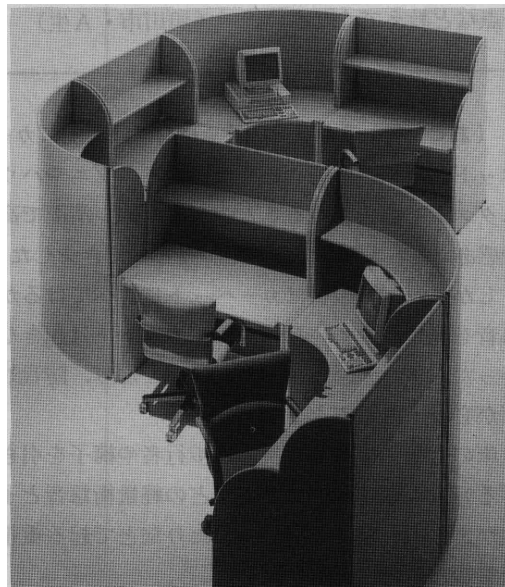
これはウインザーチェアの名前で、広く親しまれているタイプの椅子で、十七世紀後半イギリスで民衆により自然発生的に作られた素朴な挽物技術によるものが原型となっています。渡辺力氏（Qデザイナーズ）の手により、非常にシンプルでスキのない形にまとめられました。基本構造は原型のものとは大きく変わらず、直材の座板の厚さによりネジレを考慮し、脚・背の挽物の角度が強度を保持し、三角形の構成を基本としております。これらの部品は太さ・長さ・厚さ等が全体のプロポーションに大きく左右し、笠木の部分では木造建築の伝統的手法にみられるクサビ（シタン材）を打ち込むことにより、圧縮し継ぐという仕上げをみせています。それと道産のナラ材を使用することにより、シタン材のクサビをアクセントとしてナラ材の優しい色合いに緊張感を与えております。

以上椅子について触れましたが、もう一つの例として、木製のオフィス家具システムを紹介しま



す。近年オフィスブームにあり、企業のC Iの確立とか職場環境の見直しなどが叫ばれていますが、インテリアセンターでは4年程前から、当時アメリカにおられた清水忠男氏（現在千葉大学助教授）により開発を進めてきました。1988年度には、北海道の主催する、第二回北の生活産業コンペにおいて大賞を受賞した製品です。木の持つ温かさや手触りの良さにより、オフィス空間を快適なものにする一方、システムとしては独立したデスク類を基本単位としており、配置変えが容易です。また、デスク上のパネルの組み合わせにより個人領域を多用に利用できるシステムとなっております。

オフィス家具市場においては木製家具の進出は有望であり、オフィス先進国アメリカでのオフィ



家具市場は1兆2000億円（140円/\$）あり、そのうち30%までが木製です。しかも、これはさらに伸びる傾向にあります。日本の場合も、当然このような状況におかれることが予想されます。

モノづくりは、いつの時代でもその形式や表現は異なっていようと、基本は同じです。これまで椅子を中心に説明をしてきましたが、我々のあつかう木製家具は天然資源である木材を素材にしており、いま地球的に自然保護が叫ばれている中

で、我々の生活を支えてくれる木材を見直す時が訪れています。木工という伝統ある仕事が、機械化により精度よく効率的に作られ発展してきましたが、あまりにも完全な工業生産的な製品として捉えられすぎてはいないでしょうか。『山にいれば良い木も悪い木もない。人間の世界におりるから、良いとか悪いとか差別をつけられてしまう。木にとっては山にいた方が幸せである』と、ある木工作家は語っています。